

1 境界とは



岩下 明裕
IWASHITA Akihiro

長崎大学グローバルリスク研究センター センター長
北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター 特任教授

境界とは空間や人を分ける線であり、自然に存在するものではなく、人の意思や社会の事情によって形づくられてきた。特に国境は歴史や状況に応じて姿を変え続ける動的な存在であり、その成り立ちや役割に着目し、時代や地域において変わりゆく意味を考える。

はじめに：境界の人為性

ボーダー（境界）とは何であろうか？ 空間を遮るもの、人と人を切り離すもの。本来はつながっているものを遮断する「壁」や「フェンス」のイメージを持たれる方が多いのではないだろうか？ 例えば、地球を見てみよう。山や川、海といった自然な境界はあるが、そこには国境は描かれていない。国境を含む、私たちがイメージする境界は実は人間が作ったものにすぎない。皆さんが思いつく「世界地図」。それは国と国に分割されているが、英語では「政治地図」と呼ぶ。地球にとってみれば、人間が勝手に引いた線にすぎない。

一見、私たちの暮らしにとって所与であり、前提となりそうな境界だが、それが作られ、動かせるものであることに気がつく。北米の小さな、とある空港で飛行機を待っていたとき、のどが渴いたのでビールを買いに行った。レストランのような区切られた空間はなく、ビールをカウンターで買い、周りの椅子で飲むというスタイル。そのとき、黄色の看板と青い線に気が付いた。そこにはこう書かれてあった。「アルコールを持ってこの線を出てはいけない」。

北米の多くの地域では、アルコールはパブリックな場所で飲むことを禁じられている。そこで私的な空間をつくるべくこの線が引かれたわけだ。でもこの線を引いたのはビルの管理者である。この線に仕切られた空間が狭すぎると苦情を言ったり、多少、向こう側に押しやっても気が付かれないだろう。そもそも、いっそ空港のスペースを私的なものにした、り、すべて公的なもの（つまり、ビールを売らない）という判断もできる。そう、境界は人間の意志と力で変わるもの。



写真1 空港でビールを飲みながら境界を考える

人間とは境界付けられた生き物である

他方で人間は境界なしでは生きることができない。そもそも人間の生活範囲には限りがあり、どこまでもシームレスではない。山や川、海など自然のバリアに阻まれ、生活範囲を制御できる力も限られ、人間が支配できる空間は無限ではない。さらに他者の存在がある。人々の集団の力と力がぶつかりあい、紛争が起こる。そしてある種の「なわばり」が生まれる。これが境界の誕生である。境界付けは空間の秩序付けを意味している（b/ordering）。空間の秩序付けのため、一元化した権力を有し、権力を行使する正統性を持つ国家が主語になったとき、強固な境界が誕生する。これが国境である。

とはいえ、国境は当初、必ずしも一本の線ではなかった。時には人為的に緩衝帯が設けられることもあったが、人々が入りにくい難しい自然空間ではそれは曖昧にされていた。自分たちのものと主張する空間を排他的に支配する力が十分ではなかったからだ。やがて生産力や科学の発展で人間の支配できる範囲が拡大すると、フロンティアが消滅する。このプロセスでは紛争が絶え間ないが、そのコストの大きさゆえに徐々に争いを制御し、支配空間を安定化するモチベーションが生まれる。境界の曖昧さは消え、面は線になっていく。かくして国境が世界を分割する。

一度、世界が国境で覆われたらあとは利益をめぐる空間の奪い合いが始まる（深海底や南極などはまだ例外だが、人間は本質的にそれも所有したいと考えている。かつて公海とされていたものが「排他的な水域」として囲い込まれていく現状を見よ）。かくして線は消え（消され；de-bordering）、再生される（re-bordering）。新しい線がどこに引かれるかは、様々なアクターのパワーバランスで決まる。ひとつの民族や部族を分断するかたちもあれば、川や山など地形に沿う場合もある。強国の利益や現地の事情に応じて、飛び地などもできる。線が決まれば、それを越えるモノや人の動きも生まれる（trans-bordering）。

「砦」から「ゲートウェイ」へ

境界をめぐる争いは時として熾烈である。だが永続的な争いは国家に緊張



写真2 北海道大学総合博物館の地球儀

を強いる。境界に挟まれた地域は時によって人が暮らすのも難しい。かくして「砦」であった国家間の線は共存のそれへと変わる。米墨国境地域の研究者オスカー・マルチネスは国境地域の変貌を「砦」から「共存」、「相互依存」を経て「統合」へ向かう4段階に整理した（タイムライン）。境界地域が最も繁栄するのは、「相互依存」が高まりゲートウェイとして機能する時だ。「砦」として軍事化された段階や、「共存」とはいえ行き止まりであれば、境界地域は「端」ととどまる。逆に欧州のシェンゲン協定のよう、域内で国境を越える移動が自由化されると境界地域は素通りされるのみとなる。

一度、そこに立ち止まり、向こう側へとゆっくりつながる。このように人とモノが滞留するゲートウェイは現地の人々に利益をもたらす。境界地域はここで「行き止まり」「後進地域」「悪の入り口」というネガティブな観点から、「外への窓口」「富の集積地」「交流による刷新」といったポジティブな性格を帯びる。とりわけ、1980年代の経済的依存の深化とこれ

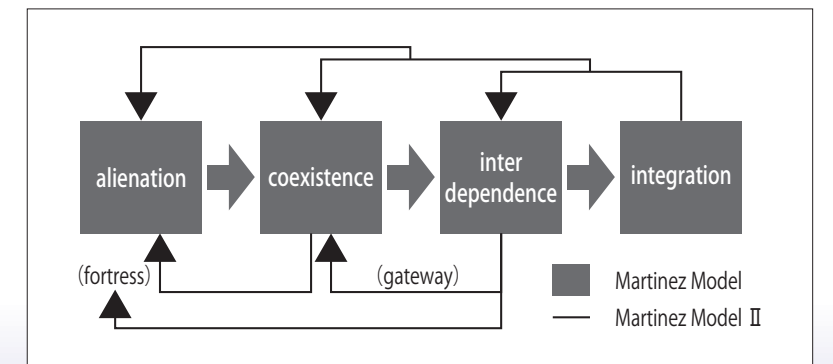


図1 マルチネス・モデルをアップデート



写真3 「ざるの国境」：グアテマラとメキシコ

に続く冷戦終結は、国境の敷居を低くし、境界地域には光が当たった。米墨国境地域のローカルな研究者の集まりにすぎなかったAssociation for Borderlands Studiesが北米のみならず、欧州やアジアの境界地域研究を糾合し、世界学会になったことや、冷戦終結の過程で欧州に誕生したネットワークBorder Region in Transitionが中東やアジア、アフリカにまで広がったことなど、ボーダースタディーズは「ルネサンス」を迎えていく。ただロシアのウクライナ侵略後、欧州の国境は再び固く閉ざされるようになった。マルチネスのモデルは一方通行ではなく、「相互依存」が壊れ、国境が再び「砦」になりうることも示唆している。BREXIT(英国の欧州連合離脱)のように欧州内の亀裂も深まっている。

透過性：人とモノのフィルタリング

国境（地域）の変貌をタイムラインで捉える以外に、2つの重要なアプローチがある。ひとつは透過性（一種のフィルタリング）という考え方である。これは国境をアクターとみなし、その「膜」が何を通して、何を通さないかを比較する。例えば、先に挙げた



写真4 米墨国境：「トランプの壁」の施策

シェンゲン協定だが、一度、域内に入れば移動は自由でも、域内に入るまでに壁がある。米国や日本の国籍者であれば簡単だが、アジアの多くの人々にその自由はない。米国だって同じだ。入国の難易度はあなたが持っているパスポートで決まる。一般に米国へのビザを取るのは容易ではない。

モノもフィルタリングされる。トム・ハンクスの主演映画「ターミナル」をご存じだろうか？ トム・ハンクスの米国到着直後、祖国でクーデターが勃発。これによりパスポートが無効となり、入国できないまま、JFK空港（ニューヨーク）に足止めを食らう。彼は空港ターミナルで寝泊まりするはめになるのだが、

ハイライトはカナダからの入国者が「不法」な薬物を所持していると拘束されるシーンだ。彼は瀕死の父親のための薬を持ってロシアに行く途中、トランジットで米国に入国した。だが米国の法律はこの薬の国外への無許可持ち出しを禁止。薬の没収に抵抗しようとし、彼は捕まったのだが、この薬、動物用であれば持ち出しは許可される。規則を熟知した主人公が機転を利かせ、このロシア人を助けるという展開だ（そのせいで空港施設長は怒り、主人公への当たりの厳しさが増すのだが）。つまり、同じモノが用途次第で通れたり通れなかったりする。

ここで留意しなければならないのは、透過性の高さが必ずしもポジティブを意味しない点だ。すでに述べたように、シェンゲン協定は一度、域内に入れば人の移動は100%近い透過性を持つ。実はメキシコとグアテマラ国境も同じ。ただここは密輸、密入国がほぼ100%。国境警備隊によれば「止められない」からだそう。米国を目指す中米からの脱出者は数多く、2018年、彼らがキャラバンで米国サンディエゴに近づいたとき、第1期政権下のトランプ大統領は米墨国境に新たな壁の建設を計画し、断固として押し戻そうとした。

社会構築：「壁」か「フェンス」か

最後に境界が必ずしも物理的なものとどまらず、多くの表象や認識と結びついたものであることを記しておきたい。イスラエルとパレスチナ自治区の間を遮断する構築物。イスラエル人はこれを「テロリストから守るフェンス」、パレスチナ人は「自分たちを抑圧する壁」と見ている。同じものを見てもどこから見るかによって変わってくる。同じように、米国人にとっての国境構築物は単なる「フェンス」にすぎないが、メキシコや中米の人にとって、これはそびえ立つ「壁」だろう。

「砦」としての国境は、外に向かう防波堤。軍事以外にも「テロ」「感染症」「密輸・密入国」等から空間を守るものと表象される。国境が暗い、怖いものと

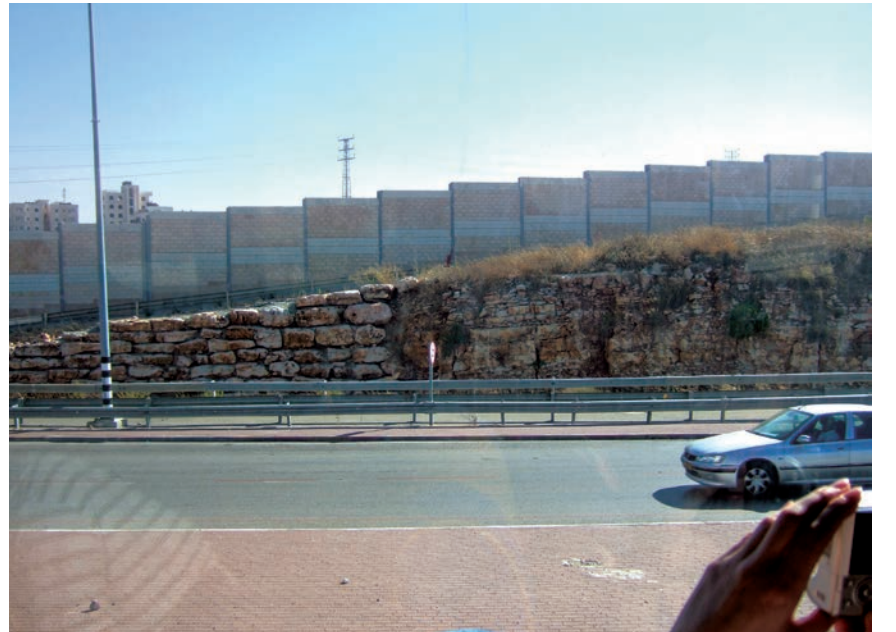


写真5 壁の向こう側がパレスチナ自治区、手前がイスラエル

思われるのも当然だろう。特にロシアや中国など統制の厳しい国家の境界ではそれを痛感する。だがポスト冷戦期の相対的な平和な時代、国境を「ゲートウェイ」として享受した私たちは、世界中が再び「壁」で覆いつくされつつある危機に面して、これまでの経験と知をもとに立ち向かわなければならない。国境をめぐる地域の安定と平和なしに世界の安寧はない。私はボーダーを結ぶツーリズムの実践を今も続けている。



境界を楽しむツーリズムの実践



世界はボーダーフル

<参考資料>

- 1) 岩下明裕『入門国境学：領土、主権、イデオロギー』中公新書、2016年
- 2) 岩下明裕編『ボーダーツーリズム：観光で地域をつくる』北海道大学出版会、2017年
- 3) 岩下明裕『世界はボーダーフル』北海道大学出版会、2019年
- 4) 伊豆芳人編『ツーリズム 未来への光芒』北海道大学出版会、2022年
- 5) 川久保文紀『危機の中の境界地域』文真堂、2026年